

第6章 情報発信活動

1. シンポジウム

1.1 シンポジウム概要

本取組に関するシンポジウム『教学マネジメントの改善と学修成果』～学生支援型 IR の可能性～が、2014 年 11 月 22 日（土）に関西国際大学尼崎キャンパス KUIS ホールにて 170 名を超える参加のもと開催された。

小笠原氏の基調講演では、基礎学術系分野、職業系分野、実学系分野それぞれの枠組みの特徴と教育戦略を整理した。特に、実学的分野では教育目標が拡散しカリキュラムが総花的になること、ディシプリンに基づく縦方向の流れを整理し、コンピテンスに基づく横方向の流れを強化して職業的レリバンスを獲得すること、そして、ハイ・インパクト・プラクティス（HIP）化が必要であることが説明された。

連携事業の中間報告では、取組の全体像として、①HIP の充実、②学修成果の評価方法の開発、③教学マネジメントシステムの確立の 3 本の柱に沿い、事業の成果と課題について報告を行った。各連携校からは HIP の取組事例として、淑徳大学のサービスマーケティングの取組、北陸学院大学の PBL 型授業である Mission Innovation Project の報告があった。また、くらしき作陽大学からは、ルーブリックの活用例および教学マネジメントに関する全国調査についての報告があった。

パネルディスカッションでは、義本氏より、国の政策として「学修成果の可視化」をどのように捉えているのか、および最近の取組事例についての発表があった。次に、大塚氏より、教育心理学者の立場から「主体的な学び」と「学修成果の可視化」をどのように実現すべきかの課題について説明をいただいた。最後に、取組代表校である関西国際大学 濱名学長より本事業で目指している学修成果の可視化の方法とその評価法について、本取組が直面している課題を交えながら説明があった。

その後、フロアからの質問に対してそれぞれのパネリストが意見を述べた。その中で、IR の取組が必要不可欠であり、まずはインフラ整備や専門的職員養成が急務であること、また情報公開を進める必要があるといった意見が出た。

このシンポジウムにおいて、本取組における「主体的な学び」、「学修成果の可視化」についての議論が深まったことにより、新たな課題を発見することができた。

1.2 シンポジウム次第

文部科学省 平成 24 年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組
「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」シンポジウム

『教学マネジメントの改善と学修成果』

～学生支援型 IR の可能性～

開催日時

2014 年 11 月 22 日（土） 13:00～17:00

開催場所

関西国際大学 尼崎キャンパス 3 階 KUIS ホール

主催

関西国際大学・淑徳大学・北陸学院大学・くらしき作陽大学

【趣旨】

高等教育のユニバーサル化により、学生の多様化は、学習目的、学習意欲、学習習慣、学力の各側面で進行しています。多くの大学、とりわけ小規模の私立大学においては、様々な学生を受け入れつつ、限られた資源の中で、学士課程教育の質保証の実現を可能にする“仕組み”をいかにして確立するかが問われています。この課題解決のため、本取組では各連携校が掲げるディプロマポリシーの達成に向けて、①学修の質を向上させる上で教育効果が高いといわれる体験活動を通した HIP (High-Impact Practices) による教育方法を充実させること、②成績評価の可視化、③教員の教育力の向上をはかることを通じて、組織的教育を可能にする教学マネジメントの確立をめざしています。

このシンポジウムでは、2年半の本取組の成果を報告するとともに、主体的な学習者を育成するための教学マネジメントがどうあるべきか、学修成果をどう可視化し、どう活用すればよいか、参加者の皆様と議論を深めたいと思います。

【登壇者プロフィール】

文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当） 義本 博司氏（よしもと ひろし）

京都大学法学部卒業、米国ロチェスター大学経営大学院修了。 高等教育局大学振興課長、高等教育企画課長、大臣官房会計課長、 大臣官房審議官（初等中等教育局担当）を歴任。

大学教育学会 会長/北海道大学名誉教授 小笠原 正明氏（おがさわら まさあき）

北海道大学大学院理学研究科修士課程修了。博士{工学}。第3回日本放射線化学会賞受賞。北海道大学教授、東京農工大学教授、筑波大学特任教授、同客員教授を歴任。元財団法人大学基準協会「特色ある教育支援プログラム」実施委員会委員。専門は化学、高等教育論。

独立行政法人大学入試センター試験・研究副統括官／教授 大塚 雄作氏（おおつか ゆうさく）

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。大学入試センター研究部助手、メディア教育開発センター研究開発部助教授、教授、大学評価・学位授与機構評価研究部教授、京都大学高等教育研究開発推進センター教授、同センター長を経て、2014年4月より現職。専門は教育心理学、教育評価。

学校法人濱名学院 理事長／関西国際大学 学長 濱名 篤（はまな あつし）

上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程修了。博士（社会学）。主な兼職として、文部科学省中央教育審議会臨時委員、同学校法人運営調査委員、国立教育政策研究所評議員、独立行政法人大学入試センター運営審議会委員など。専門は高等教育論、教育社会学。

（パネルディスカッション・司会者）

淑徳大学 高等教育研究開発センター 准教授 芹澤 高斉（せりざわ たかなり）

中央大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学（経済学修士）。松阪大学専任講師、助教授、三重中京大学准教授を経て2013年4月より現職。2013年度文部科学省大学間共同教育推進事業「主体的学びのための教学マネジメントシステムの構築」において関西国際大学に出向。専門は経済学。

【プログラム】

13 : 00～13 : 10	【総合司会】 関西国際大学 渉外部長 山崎浩一
	開会の挨拶 関西国際大学 学長 濱名 篤
	来賓挨拶 文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当）義本 博司氏
13 : 10～13 : 15	シンポジウム趣旨説明 関西国際大学 学長補佐／評価センター長 藤木 清
13 : 15～14 : 15	基調講演 主体的な学習者育成のための教育改革：大学教育の「構造化」とは何か？ 大学教育学会 会長 ／ 北海道大学名誉教授 小笠原 正明氏
14 : 15～15 : 15	各連携大学より本取組の中間報告 ○「本取組の中間報告」 関西国際大学 学長補佐／評価センター長 藤木清 ○「淑徳大学におけるサービスラーニング教育の展開」 淑徳大学 学長特別補佐／コミュニティ政策学部教授 磯岡哲也 ○「初年次教育における PBL 型授業の実践と課題」 北陸学院大学 人間総合学部社会学科 学科長 俵 希實 ○「アセンブリー・アワーにおけるルーブリックの活用」 くらしき作陽大学 子ども教育学部助教 田崎 慎治 ○「教学マネジメント全国調査」 くらしき作陽大学 学長顧問／KSU 高等教育研究センター所長 有本 章
15 : 15～15 : 25	休憩
15 : 25～16 : 55	パネルディスカッション 「教学マネジメント改革と学修成果の可視化」 ～その可能性と課題解決に向けて～ 【パネリスト】 文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当） 義本 博司氏 大学教育学会会長 ／ 北海道大学名誉教授 小笠原 正明氏 独立行政法人大学入試センター 試験・研究副統括官／教授 大塚 雄作氏 関西国際大学 学長 濱名 篤 【司会】 淑徳大学 高等教育研究開発センター准教授 芹澤 高斉
16 : 55	閉会の挨拶 北陸学院大学副学長 朝倉 秀之

＜配布資料一覧＞

○シンポジウム趣旨説明資料

主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築（取組概要図）

○基調講演資料 **資料1**

主体的な学習者育成のための教育改革：大学教育の「構造化」とは何か？

○各連携大学の本取組の中間報告資料 **資料2**

「大学間連携共同教育推進事業～中間報告」 関西国際大学

（参考資料）

- ・教室外プログラム及びアクティブラーニング型授業の要件
- ・コモンルーブリック・KUIS 学修ベンチマーク

「淑徳大学におけるサービスマナー教育の展開」 淑徳大学

「地方大学初！社会学科実践型人材育成プロジェクト「M I P」スタート」 北陸学院大学

「アセンブリー・アワーにおけるルーブリックの活用」 ぐらしき作陽大学

○パネルディスカッション資料 **資料3**

「教学マネジメント改革と学修成果の可視化－現状と課題－」

文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当） 義本 博司氏

「学修成果の可視化ということ」

独立行政法人大学入試センター 試験・研究副統括官／教授 大塚 雄作氏

「学修成果をどのように身につけさせ、評価していくのか」

関西国際大学 学長 濱名 篤

○その他の配布

- ・質問票
- ・アンケート
- ・本取組リーフレット

関西国際大学尼崎キャンパス

2014.11.22

平成24年度採択 大学間連携共同教育推進事業

主体的な学びのための
教学マネジメントシステムの構築

主体的な学習者育成のための教育改革： 大学教育の「構造化」とは何か？

北海道大学名誉教授
大学教育学会会長

小笠原 正明

本講演の内容

1. 本事業の印象
2. 質の高い学士課程教育とは
3. 高等教育のツールの多様化
4. 階層構造による整理
5. 日本の大学/大学院の構造
6. 基礎学術分野の教育戦略
7. 職業的分野の教育戦略
8. 「実学的」分野の教育戦略—これが問題！
9. HIP化の手順
10. 大型クラスの学修支援がポイント

本事業の印象

「性格の異なる4つの大学が、共同して教室内外のアクティブラーニング化に取り組んでいるのは画期的」

「ルーブリック等のアセスメント方法の開発と組み合わせてアクティブラーニング化を推進する方針は時宜を得ている」

「教養的科目やキャリア教育科目で成功したら、次の段階として学士課程の柱となる専門教育へ」

「アクティブラーニングにはコンテンツ依存性がある」

→ どの科目にどのツールが向いているか？

「ディシプリンとの協力・連携が不可欠」

(平成25年度事業に対する外部評価委員としてのコメントより)

コメントの背景説明が必要

3

質の高い学士課程教育とは

「教員と学生とが意思疎通をはかりつつ、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する問題解決型の能動的学修（アクティブラーニング）によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした教育」

(平成24年度中央教育審議会大学分科会大学教育部会の『審議のまとめ』より)

近代大学のパラダイムは不変

(小笠原・細川：『大学評価研究』, 第13号, pp.19-29, 2014年)

4

高等教育のツールの多様化

アクティブラーニング	ループリック
HIP(High-Impact Practices)	カリキュラムマップ
グループワーク	ポートフォリオ
ディスカッション	ベンチマーク
プレゼンテーション	IR
インターンシップ	プレイスメントテスト
サービスラーニング	アセスメントポリシー
ライティング	ラーニングコモンズ
クリッカー	ロールプレイ
PBL	SNS
	オフィスアワー

階層構造がある
それぞれのツールに発展の経緯

5

階層構造による整理

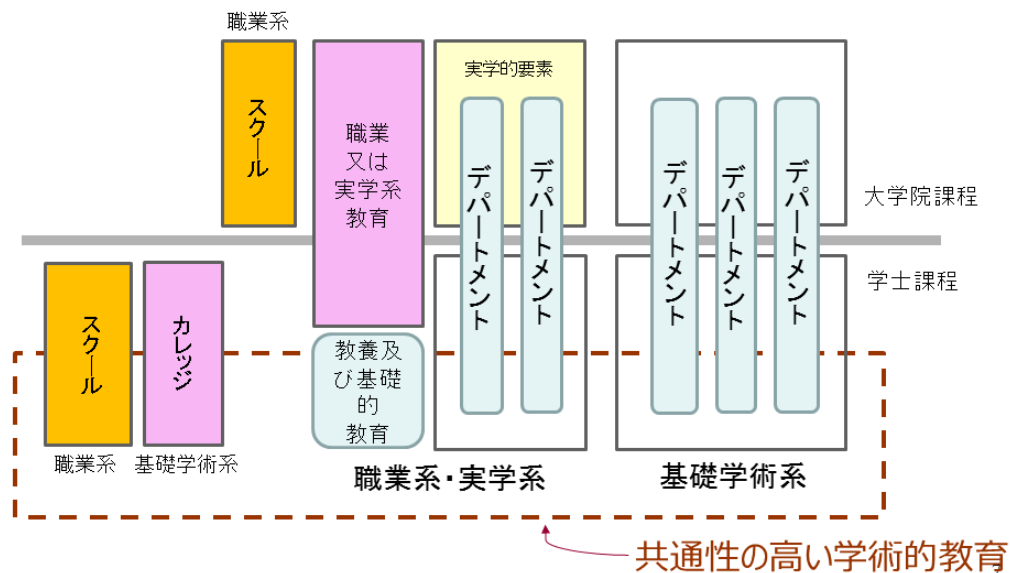
HIP	IR
アクティブラーニング	カリキュラムマップ
グループワーク	アセスメントポリシー
ディスカッション	ループリック
プレゼンテーション	ポートフォリオ
インターンシップ	ベンチマーク
サービスラーニング	プレイスメントテスト
ライティング	ラーニングコモンズ
クリッカー	SNS
ロールプレイ	
PBL	
オフィスアワー	

多様なツールどう使うかは教育目標しだい
教育目標は学士課程の性格しだい

6

日本の大学/大学院の構造

3種類の共存：職業系、基礎学術系、実学系



日本の高等教育：「追いつき追い越せ型」

国家の政策誘導による学部・学科の増設

- 多様な学部・学科の誕生、発展、消滅
- 学術的課程と職業的課程の未分離・混在

“学術的課程と職業的課程：カリキュラムの編成原理が違う！”

- 学術的デパートメントの未成熟

その結果

- 580に及ぶ学科名の種類
 - 国際的な対応関係を失う → グローバル化できない理由の一つ
- 脆弱な基礎的学術分野の教育
- 細分化した縦割カリキュラム
- 学科における自給自足主義
- 教職員の過重負担

1 基礎学術的分野の教育戦略

➤ フンボルトの理念と潮木の注釈

「知識をいまだ発見されていないもの、たえず研究されるべき対象として追及せよ」

「〔前略〕教師だけではなく、学生もそうしなければならないと彼は言う」

「一種の知的コンミュン」

「ここには『学ぶ学生』ではなく、『研究する学生』という新たな考え方が登場する。つまり学生は学ぶためにだけ大学にいるのではなく、研究をするために大学にいるのだという考えである。」

文献：潮木守一：『広島大学高等教育研究センター 大学論集』第38集、pp.171-187、2006年

➤ 構成主義による現代的解釈

「学習者たちが、それぞれの中に存在する概念を中心に、自分自身の理解の仕方でも知識を組み立てる—学習者にとっては研究と発見の過程」

（卒業生がすべて研究者にならなければならない、という意味ではない）

9

基礎学術系：変わらない教育精神と枠組み

➤ 枠組みの特徴

1. 骨格のはっきりしたアカデミック・プログラム
2. 標準化された厳格な試験制度
3. 比較的自由的な“ラボワーク”
4. 多種多様な自学自習の学習支援システム

➤ 有効な仕掛け・ツール

ラボワーク/ゼミ

ディスカッション（TA/SA支援）

グループ学習

ラーニングコモン、多機能型図書館

教員によるオフスアワー

TAによるオフィスアワー

基本的には試験対策

10

2 職業的分野の教育戦略

➤ 枠組みの特徴

1. 職業的レリバンスがカリキュラムの構造を決める
2. 認知領域の教育が前提
3. 必須の実技・実習と厳格な評価システム
4. ワンセット主義：一つも欠かせない要素がある
5. 外部による資格試験（国家試験等）

➤ 有効な仕掛け・ツール

インドクトリネーション（何らかの教え込みの課程）

テキスト（オンライン/オフライン）

反転授業

ケーススタディ、PBL

ロールプレイ、OSCE

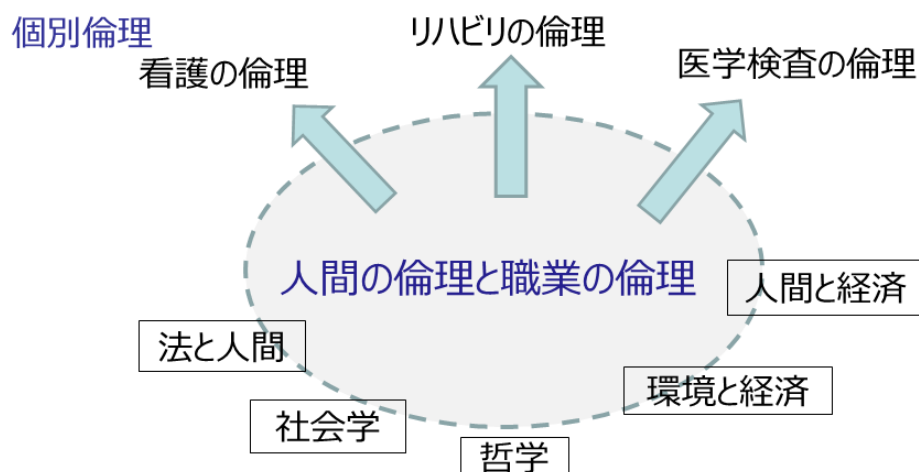
インターンシップ

分野によって確立された手法

11

職業系の課題は教養的教育の構造化

例：倫理による医療系教養の構造化（案）



基礎学術分野の教育ツールが有効

12

3 「実学」的分野の教育戦略 これが問題！

➤ 枠組みの特徴

- 1) 複数の伝統的学科の科目の組合せ
- 2) スペクトルが広い: 基礎学術分野から職業分野まで
- 3) 多様な職種への対応を目指す

➤ 生じやすい問題

- 1) 教育目標の拡散 ← ワンセット主義の放棄
- 2) カリキュラムが過重 (理工系の場合)
学士課程における完成を前提としていない？
- 3) 内部でさら専門分化する傾向
- 4) 共通の (目に見える) 達成目標を設定しづらい
- 5) カリキュラム管理が難しい

13

実学的分野のカリキュラムの例

学習・教育目標	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	3 年前期	3 年後期	4 年前期	4 年後期
(A) 真に人類・社会に貢献できる人材を養成する	外国語科目 教養科目							
(B) 社会における工学の役割を正しく理解する能力を養成する	教養科目							
(C) 幅広い専門分野に対応できる工学の基礎的能力を養成する	専門教育科目			○確率・統計 ○材料無機化学 ○統計物理学 ○金属組織学・流体力学 ・コンピュータグラフィックス ・材料工学実験 I	・応用数学演習 A ・応用数学 ○材料無機化学 ・移動及び速度論 ・材料工学実験 II	・応用数学演習 B ・電気工学概論		
(D) 社会での実践を指向して専門の工学的能力を養成する	専門教育科目			○結晶物理学 ○材料力学 ○機械要素設計・製造 B ○機械設計 C	○電磁気学 ○X線結晶解析 ○金属組織学・流体力学 ○材料強度学 I ○材料強度学 II ○材料工学実験 I	・電気化学 A ・電気材料 ○計算材料科学 ○環境調和材料 ○材料強度学 II ○塑性加工工学 ・有限要素法入門 ・設計と加工 ○材料工学実験 II	・安全工学概論 ・工業経済 ・物性法 ・品質管理 ・総合応用工学概論	

非常に良くできているが、3年目が苦しい！

14

実学的分野の教育改革

解決すべき問題

➤ 特定型か汎用型か？

- ・ カリキュラムは一般に総花的
- ・ 科目には学士課程として達成すべきレベルがある
- ・ しかし、特定の科目を重点化することは難しい
- ・ 卒業後に何の分野に従事するか特定できない
- ・ 職業的レリバンスの要求をどうするか？

➤ 構造的問題

- ・ 就活による卒業研究の蚕食
- ・ コースワーク配分の不均衡
- ・ 単位計算の欺瞞

HIP化とAL化のためには避けて通れない問題

15

実学系カリキュラムの概念整理の例

コンピタンス ↓	ディシプリンの系統			
	材料・ 金属工学	電気工学	機械工学	計算機科学 応用化学
問題解決能力				
工学リテラシー				
プレゼンテーション力				
リーダーシップ				
達成レベルの調整				

縦横のネットワーク化による職業的レリバンスの獲得

16

HIP化の手順

1. 学部・学科の性格の把握
基礎学術系、職業系、実学系
2. 教育学習戦略の選択
3. 教育課程のスリム化
→ 教育目標が明確になる
4. 卒業研究の位置づけ、単位配分
選択肢 1) 「ラボワーク」化：学年分散
選択肢 2) 重点化して教育課程として構造化
5. コースワークの均等配分
6. コースワークの重点的AL化
必要なツールの整備、研修
7. 教育課程全体のHIP化

教育負担を考慮した改革

17

大型クラスの学習支援がポイント

〔ALの要素〕	〔対応する支援ツール〕
1. 学習マネジメント	ラーニングマネジメントシステム (LMS)
2. テキスト	ハードコピー／オンライン
3. 演示実験	実験補助チーム、映像システム
4. 討論	討論支援チーム、ラーニングコモン
5.	討論室付の図書館
6. 調査	図書館利用、データベース検索研修
7. チュータリング	オフィスアワー
8. レポート	オンライン提出、フィードバックシステム
9.	ライティングセンター
10. 評価	ルーブリック、評価支援チーム

18

まとめ

1. 「主体的学び」は高等教育の生命線
2. 主体的学びの実践的意味は学士課程の「文脈」により異なる
3. 基礎学術系教育のパラダイムは不変
4. 職業系教育は職業的レリバンスが内容を決定
5. 実学系教育は概念整理が必要
 - ディシプリンに基づいた縦方向の流れ
 - リテラシー、問題解決力などコンピタンスに基づいた横方向の強化
 - 縦横の強化による職業的レリバンスの改善
6. HIP化は戦略的に重点的に

19

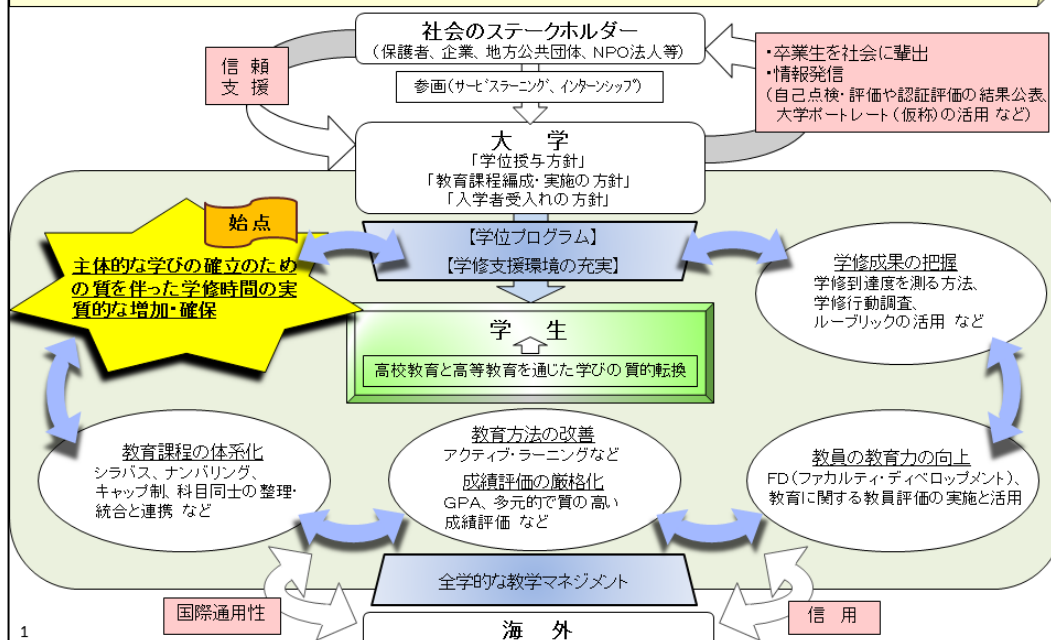
教学マネジメント改革と学修成果の可視化 ― 現状と課題 ―

平成26年11月22日(土)
 大学間連携共同教育推進事業
 「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」
 シンポジウム

文部科学省大臣官房審議官(高等教育局担当)
 義本 博司

学士課程教育の質的転換への好循環の確立

・予測困難な今の時代を生きる若者や学生が「生涯学び続け、どんな環境でも「答えのない問題」に最善解を導くことができる能力」を育成し、知的な基礎に裏付けられた技術や技能を身に付けることができる大学へ
 ・そのためには、学生が主体的な学びを深めるとともに、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与え合いながら知的に成長することができるよう、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の課題解決型の能動的な授業を中心とした質の高い学士課程教育へと質的に転換



中央教育審議会における答申

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）平成24年

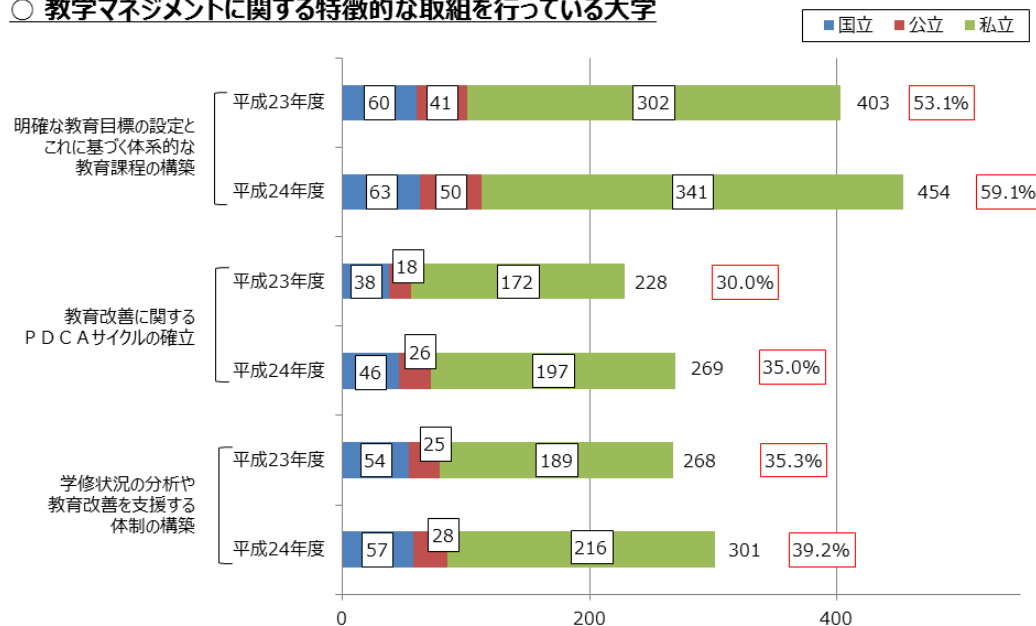
○ 学長を中心として、副学長・学長補佐、学部長及び専門的な支援スタッフ等がチームを構成し、当該大学の学位授与の方針の下で、学生に求められる能力をプログラムとしての学士課程教育を通じていかに育成するかを明示すること、プログラムの中で個々の授業科目が能力育成のどの部分を担うかの認識を担当教員間の議論を通じて共有し、他の授業科目と連携し合いながら組織的な教育を展開すること、プログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則った成果の評価、その結果を踏まえたプログラムの改善・進化という一連の改革サイクルが機能する全学的な教学マネジメントの確立を図る。

学長を中心とするチームは、学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、学修の成果に係る評価等の基準について、改革サイクルの確立という観点から相互に関連付けた情報発信に努める。特に、成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト（学修到達度調査）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする。

2

我が国の大学における状況 ①

○ 教学マネジメントに関する特徴的な取組を行っている大学

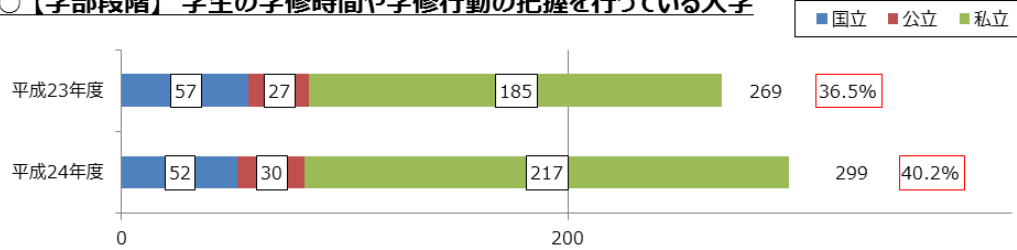


3

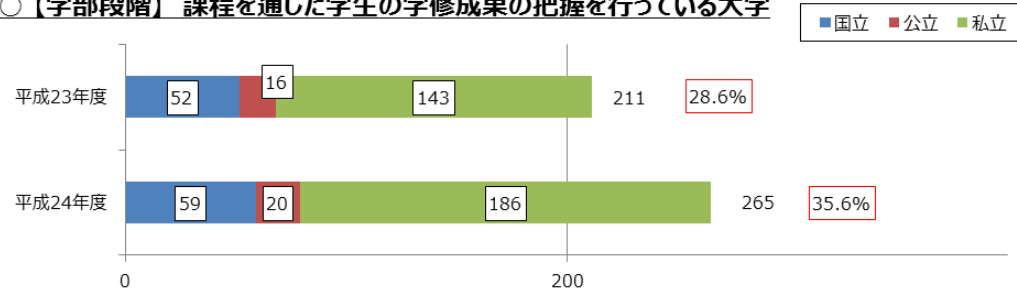
（出典）文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」

我が国の大学における状況 ②

○【学部段階】 学生の学修時間や学修行動の把握を行っている大学



○【学部段階】 課程を通じた学生の学修成果の把握を行っている大学

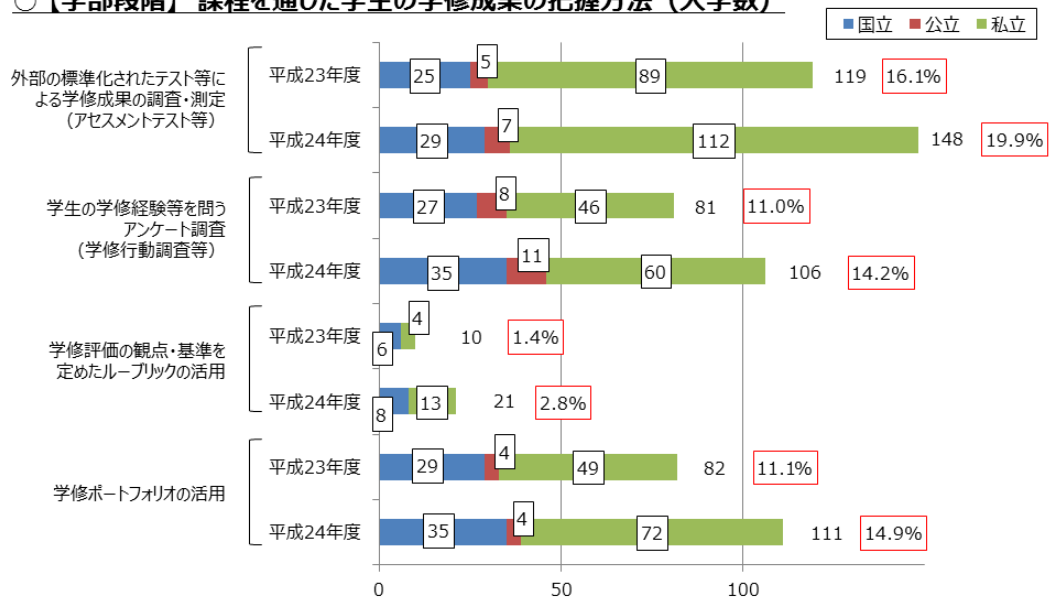


4

(出典) 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」

我が国の大学における状況 ③

○【学部段階】 課程を通じた学生の学修成果の把握方法（大学数）

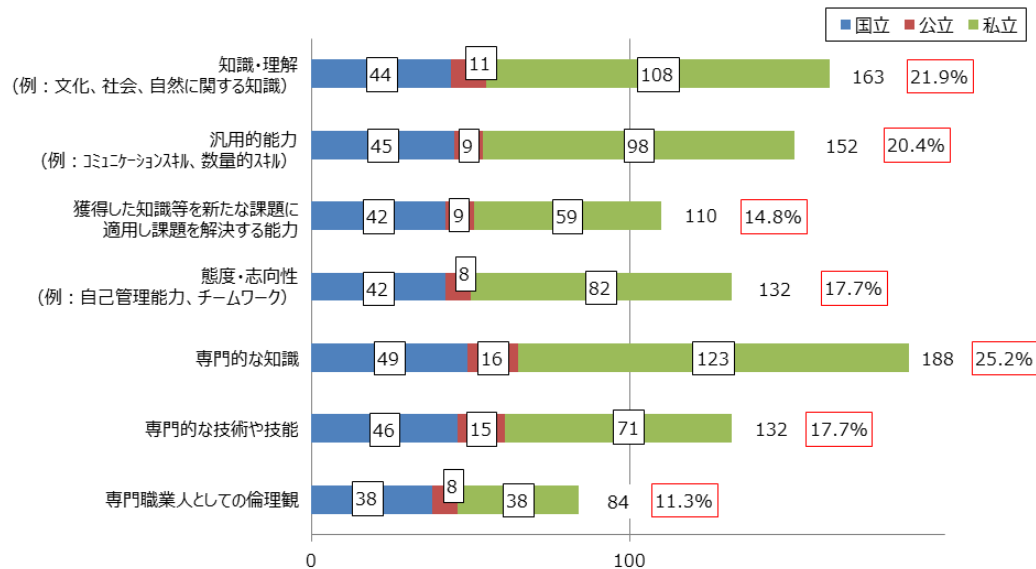


5

(出典) 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」

我が国の大学における状況 ④

○【学部段階】 学修成果として調査・測定等を行っている事項（平成24年度・大学数）



6

(出典) 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」

大学教育再生加速プログラム：AP 概要

平成26年度予算額 10億円【新規】

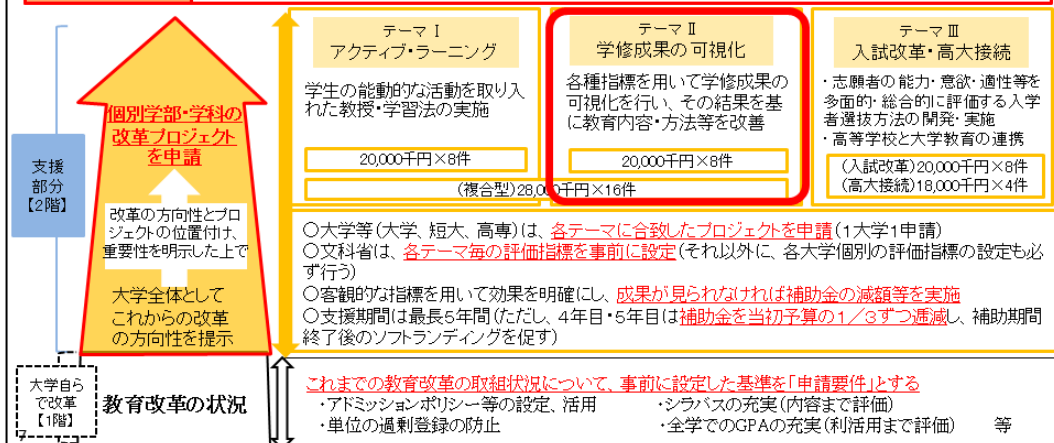
背景

・社会において求められる人材は高度化・多様化しており、大学は待ったなしで改革に取り組み、若者の能力を最大限に伸ばし、社会の期待に応える必要がある

課題発見・探求能力、実行力といった「社会人基礎力」や「基礎的汎用的能力」などの社会人として必要な能力を有する人材を育成するため、大学は教育内容を充実し、学生が徹底して学ぶことのできる環境を整備する必要

国として進める改革の方向性

「これからの大学教育等の在り方について」(教育再生実行会議 第三次提言 平成25年5月28日)
 ・教育方法の質的転換(学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習法(アクティブ・ラーニング)、双方向の授業展開など)
 ・全学的教學マネジメントの改善(学生の学修時間の確保・増加、学修成果の可視化、教育課程の体系化、組織的教育の確立など) → 国はこうした取組を行う大学を重点的に支援
 「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(教育再生実行会議 第四次提言 平成25年10月31日)
 ・多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換 → 国は、引き続き財政支援により大学を積極的に支援



「大学教育再生加速プログラム：AP」選定取組①



大学等名：新潟工科大学

テーマ：テーマⅡ（学修成果の可視化）

・ポートフォリオを基軸とした①ルーブリック、②到達度テスト、③企業との対話による評価により、学修成果の可視化を行う。

・可視化によって「学修目標・計画⇒学修⇒学修成果の可視化⇒きめ細かい学生指導⇒学修計画の改善」という学生の学びと、「3つのポリシーを基本とした教育目標・計画（シラバス）⇒教育⇒学修成果の可視化⇒FD⇒内部と産業界等からの外部評価⇒教育計画・教育方法の改善」という教学マネジメントの2つの改善ループを構築する。



	26年度	28年度 (目標値)	30年度 (目標値)
ラーニングポートフォリオの学生利用率	0%	100%	100%
ルーブリックで評価を実施した科目 (ゼミ・実験科目のうち)	0%	80%	100%
到達度テスト・資格取得による可視化	20%	100%	100%
8企業との対話による評価	25%	80%	100%

・厳正な成績評価と学修成果が明確となり、客観的な学生指導及び学生個々の到達度の伸長を図ることが容易となる。

・学修成果の可視化を基軸とした「学生の学びのループ」「教学マネジメント改善のループ」の構築を図ることにより、教育改革を進め、産業界や地域が求める人材を育成する。

「大学教育再生加速プログラム：AP」選定取組②



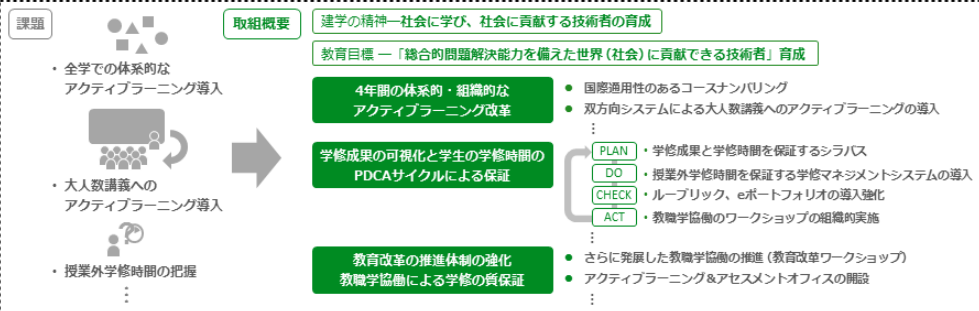
大学等名：芝浦工業大学

テーマ：テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・Ⅱ（学修成果の可視化）複合型

建学の理念の下、学生の主体的な学びを促し、学修成果の可視化の為の取組を行う。

学長をリーダーとする教職学（学生）協働の組織的な体制のもとで、下記の3つの施策の実施により、

体系的なアクティブラーニング（AL）の改革、学修成果の可視化と学修時間の保証、教育改革の推進体制の強化を実現する。



成果 平成30年度（目標値）

・学生の授業外学修時間の確保
7時間 → 36時間/週

・必修科目のアクティブラーニング割合 29% → 50%

・アクティブラーニングを受講する学生の割合 91% → 96%

4年間の体系的なアクティブラーニングの全学導入

・ALを含むカリキュラム設計を体系的に実施した学科

・プロジェクトを通じた実践・経験

さらに強化した教職学協働の教育改革推進体制により、これまで本学が進めてきた教育の質保証への取り組みを、学修の質保証と発展・加速させていく。

「大学教育再生加速プログラム：AP」 選定取組③



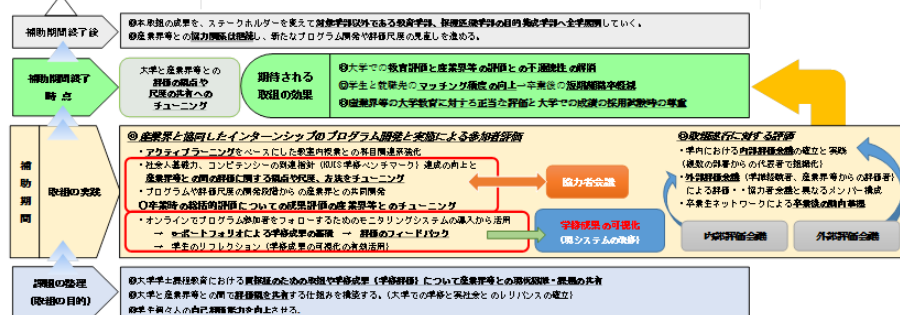
大学等名：関西国際大学

テーマ：テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・Ⅱ（学修成果の可視化）複合型

本事業は、インターンシップを糸口として、大学と産業界等との評価の観点と尺度の共有を具現化することを目的とし、産業界等での構成員（社員）評価と大学の評価との関連性や評価方法について、いくつかの事業所と連携してすり合わせていく。その結果を教育プログラムに反映させていくサイクルを繰り返すことで学修成果の可視化を進め、学生個々人の自己評価能力の向上も目指すものである。

<背景>大学の評価は産業界等には信頼されておらず、評価の観点と尺度とが共有されていないという問題がある。

関西国際大学「大学教育再生加速プログラム」事業概要図



【事業の成果】	25年度	27年度(目標値)	29年度(目標値)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	98.9%	99%以上	99%以上
学生の授業外学修時間	8.75時間	10時間	15時間
インターンシップ受入企業数	46社	60社	80社
インターンシップ・ループの作成と活用	実績なし	ループの作成 人間科学部での展開	全学的なループの 提示・展開
10Eポートフォリオ記事投稿数	18件/人	10件/人	20件/人

<事業実施による大学改革の加速効果>
①大学での教育評価と産業界等の評価との不連続性の解消
②学生と就職先のマッチング精度の向上による離職率軽減
③産業界等の大学教育に対する正当評価等

<事業実施による大学全体への影響>
本取組の成果を、対象学部以外である教育学部、保健医療学部の目的養成学部へ全学展開していく

大学間連携共同教育推進事業 概要

■ 背景 社会が急激に変化する中、様々な危機を乗り越え、持続的な成長と発展を築くためには、主体的に考える力を持ち、社会の様々な課題を解決に導く多様な人材が必要。そのために、各大学の教育の充実、学修時間の実質的な増加・確保を行うとともに、大学を超えた連携を深め、多様かつ質の高い大学教育を提供することが重要

■ 目的 国公立の設置形態を超え、地域や分野に応じて大学間が相互に連携し、社会の要請に応える共同の教育・質保証システムの構築を行う優れた取組を選定し、重点的な財政支援を行うことにより、教育の質の保証と向上、強みを活かした機能別分化を推進する

■ 対象 国公立大学(短大・高専を含む)が相互に連携し、以下の視点を踏まえ、社会の要請に応える共同の教育・質保証システムを構築する教育推進の取組 → 国公立の枠にとらわれことなく広く公募し、競争的環境の下、特に優れた取組を選定



■ 取組 以下を参考に複数の種類の取組を有機的に組み合わせ、学生のために教育の改革サイクルが回るよう計画

教育課程の体系化	共同プログラムの構築	組織的な教育の実施	教員バリエーションの強化	教育の質保証の確立
授業科目間の連携や整理、厳格な成績評価、明確な到達目標に基づく高度な教育モデル等	共同の教育プログラムの実施、単位互換、高度な教育資源の共同利用等	課題解決型・能動的学修、きめ細かな履修指導、シラバスの整備、学修支援環境の改善等	FD、教職協働、教員の教育評価、柔軟な人事・経営システム等	学修成果や到達度の把握、IR、教育の実施状況の評価の仕組みの構築、地域一体となった高大連携等

■ 事業規模及び選定方法

事業規模 地域・分野連携の別を設けず全体として45件程度選定し、最大5年間支援(補助金基準額 66,000千円以内(年間))

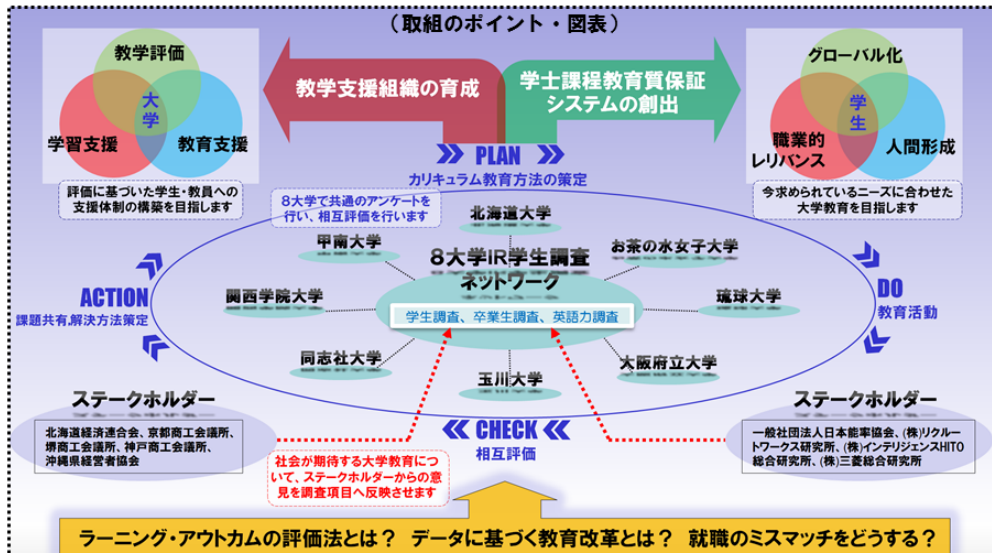
審査方法 「大学間連携共同教育推進事業選定委員会」として、審査員(両地蔵系)により選定

平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組①

取組名称：教学評価体制（I Rネットワーク）による学士課程教育の質保証

取組大学：北海道大学（代表校）、お茶の水女子大学、琉球大学、大阪府立大学、玉川大学、同志社大学、関西学院大学、甲南大学

国公立大学の連携により、全国規模の学生調査・卒業生調査・英語力調査分析を基盤として、I Rネットワークを通じた連携大学間での相互評価の結果ならびに学内の調査データを学士課程教育の質的向上に結びつける質保証システムの創出と教学支援組織の育成を目指す。



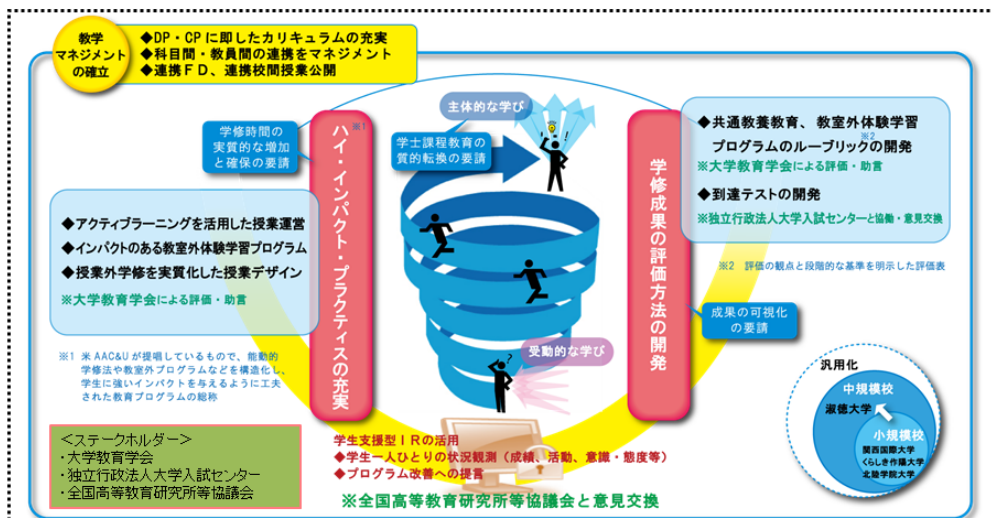
12

平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組②

取組名称：主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築

取組大学：関西国際大学（代表校）、淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学

主体的に考え行動できる力を持ち、予測困難な時代に対応できる人材育成の要請を受けて、以下の取組を実施する。
 (1) アクティブラーニング(能動的学修)及びインパクトのある教室外体験学習プログラムなど、学生が主体的に学ぶ教育方法を充実。
 (2) 学修成果を可視化するため、ルーブリック及び到達テストを開発。
 (3) 全学的な教学マネジメントのもと、カリキュラムを見直し、科目間・教員間連携を充実して組織的教育を確立。
 さらに、学生支援型I Rを用いて学生データを蓄積し、本取組の評価・改善を行う。



13

学修成果の可視化に関する国際的な動きについて

1. OECDにおけるAHELOフイージビリティ・スタディ

- 近年の高等教育の拡大や国際化の進展に伴い、国際的な質保証への要請が高まったことを受け、政府や高等教育機関、質保証機関による学修成果の評価方法の改善に資するため、OECD(経済開発協力機構)において、高等教育における学修成果の評価(AHELO※)に関するフイージビリティ・スタディ(FS)を実施。

※AHELO: Assessment of Higher Education Learning Outcomes

- 2009～2012年の間、一般的能力(Generic Skills)と分野別技能(Discipline-Specific Skills:工学、経済分野のみ)について、17カ国において実施(総計で248の高等教育機関と約2万3千名の学生が参加)。
- 我が国は、国立教育政策研究所を中心に12大学の協力のもと、工学分野におけるFSに参加。また、同分野に参加した豪及び加と工学分野の学修成果を測定する国際テスト問題バンク構築に向けて連携。

※FSは一定の成果を挙げたが、本格実施については事業規模・経費等の点で課題があることから、現在OECDにおいて最終調整中。

2. 欧州を中心としたTuningの取組

- ボローニャプロセスが深化する欧州において2001年以降、国際的な質保証への要請に応えるため、欧州の大学の主導によりボトムアップで始まった取組。学問分野別に学修成果を定義し、学位プログラムを体系的に設計・実践するための手法。共通の手法を用いることで、国レベル・国際レベルで学位プログラムの比較可能性・透明性を高める。
- 現在、欧州から北米・中南米・アフリカ・中国等各国・地域へ波及しており、質保証アプローチの一つとして国際的に共有されはじめている。我が国では、AHELOでの経験を活かし、国立教育政策研究所が工学分野におけるTuning学位プログラム設計のモデル事業に着手するとともに、諸外国における実践事例の情報発信に向けて準備中。また、一橋大学等においても、Tuningを活用した国際連携にむけて取組が進められている。

14

今後の方向性・課題

○ 教学マネジメントと改革サイクルの確立

- | | |
|----------------|---|
| P LAN | 教員中心の授業科目編成から、学位プログラムとしての組織的・体系的な教育課程への転換 |
| D o | 教員同士の役割分担と連携による組織的な教育、その実現に向けたFD活動の徹底 |
| C heck | 学生の学修成果、教員の教育活動、教育課程にわたる評価、IRの活用 |
| A ction | 教育課程や教育方法等の更なる改善 |

大学教育の質的転換の断行

○ 「学修成果の可視化」の実質化と定着

優良事例の支援と情報公開により、国内のロールモデルを構築

➡ **実質的な「学修成果の可視化」の取組を普及**

認証評価等、大学評価を活用した普及の徹底

➡ **取組の定着を図り、さらなる大学改革を促進**

15

2014. 11. 22 @関西国際大学

シンポジウム『教学マネジメントの改善と学修成果～学生支援型IRの可能性』

パネルディスカッション『教学マネジメント改革と学修成果の可視化～その可能性と課題解決に向けて』

学修成果の可視化ということ



独立行政法人

大学入試センター

National Center For
University Entrance Examinations

試験・研究副統括官 大塚雄作

1

◇『主体的学び』とは？

- 「大学教育の質的転換答申(2012.8.28)」は

『主体的学び』をもたらすか？

- ナンバリング、キャップ制など、至れり尽くせりのカリキュラムや教育システムを準備することで「主体性」を引き出せるのか？
- アクティブラーニング、ハイインパクトプラクティス(HIP)などの主旨は、授業の方法を変えるだけで実現できるのか？



★クラブ活動はHIP！
それはなぜ？

◇「意欲」をもたらす三要素

・『主体的学び』の源泉の一つ「学習意欲」をもたらすもの

- ① 学習の始発因 = 自己決定性
(その行動を自ら選んで実行しているという感覚)
 - ② 学習の行動因 = 自己効力感
(その行動をやろうと思えばできるという感覚)
 - ③ 学習の結果因 = 行動-結果の随伴性認知
(行動すればその目的となる結果が得られるという
感覚 何のために学習するのかの認知)
- これらのことを促進させる一要因
= 学習共同体(Learning Community)・
人的ネットワークなどの形成

◇学修成果の可視化とは？

- ・「可視化」とは量的に評価することなのか？
 - 一次元的な尺度(量的指標)は複雑な対象の多くの側面を捨象
量的指標はその背景の質的情報の付加が肝要
- ・量的指標はある目標を共有するコミュニティ内において見えてくる
 - 目的を共有するコミュニティにおいて量的指標の価値も共有される
量的指標を伸ばしたり他者と比較することで、コミュニティ内で評価され、
「自己効力感」につながっていく
コミュニティ外に対して一定のアカウンタブルな情報として機能し得る
- ・一人で求める量的指標はゲームや遊び = 学びにはならない
 - 一人でテレビゲームなどに夢中になって上達(高得点化)したとしてもそのこ
とをもって「学び」とか「学修」とは言えない
ゲームでもコミュニティが形成されることで「遊び」から「学び」に昇華

◇学修成果をどう評価するか？

・大学入試センター開発の総合型テストの目的

- 「言語運用力」「数理分析力」試験は「大学での学習に必要な基本的能力の測定」を目的とする ≠ 「到達度」
試験の妥当性検証や安定性の確認のために、定点観測データとして収集・蓄積していくこと自体は有意義
- 学修成果はそれぞれの専攻の背景・文脈の下で領域固有の形で見ていくことが原則 = 学習共同体で共有される目的・目標を評価基準とする

・「評価」は教育の場におけるコミュニケーションのツール

- 評価結果を一方的に伝えるのではなく、評価結果に基づいて、何らかのコミュニケーションを発生させるところに意義 = イギリスのPDPの発想
Personal Development Planning・・・ポートフォリオを利用した指導・学習機会
- ルーブリックの活用は、教員同士、教員と学生同士、どう学習を進めていったらよいかの意見交換のための素材としてむしろ機能させるべき
= 学習共同体の形成と発展のためのツール

◇教学IRをどう組み込むか？

・ポートフォリオをどう充実させ活用するか

- 学生の追跡のためにはポートフォリオなどの構成の工夫がむしろ有用
多様な学生に関するある側面を切り取った指標の全体的平均などが何を意味するかは微妙 = 個々の学生への対応には一般的処方箋があるわけではなく、それぞれに応じた個別の対応が望まれる

・学生の下位集団分類をいかに取り出すか

- 教学マネジメントに対しては適切な統計指標も有用となり得る
= 統計的な指標が意味をもつような下位集団を見つけ出すことで、より有意義で、安定的な指標を得ることが可能となる



- ・ 個々の大学の独自の理念やポリシーの共有とその実現のためのネットワーク形成
- ・ そのコミュニティの下での「形成的」評価活動と柔軟なIR活動の不断の積み重ね
- ・ 具体的取組の質的表現を含む社会への発信

大学間連携共同教育推進事業シンポジウム
『教学マネジメントの改善と学修成果』
～学生支援型IRの可能性～
学修成果をどのように身につけさせ、
評価していくのか

2014. 11. 22

関西国際大学 学長 濱名 篤

1

A.学修成果のとらえ方

2

A-1 学修成果のとらえ方

- 「大学の成績」は社会から評価されていない(後述)
- 知識暗記型学力への社会からの不信
- 専門知識重視→汎用的能力重視

cf.社会人基礎力、学士力、コンピテンシー

学修成果の可視化の必要性

教員任せ？ 学生一人一人異なる？ 10年経たないと成果が出ない？

→ 大学・学部・学科のアセスメントポリシー

直接的:外部テスト、ルーブリック、ポートフォリオ etc

間接的: 学生行動調査、学生満足度調査 etc

「学修成果」とは？

3

A-2 学修成果を評価する位相

目標の達成を測る評価方法になっているか

- **Institutional Level**(大学として)
- **Department Level**(学科として)
- **Program Level**(科目として):

科目担当者として

履修学生として

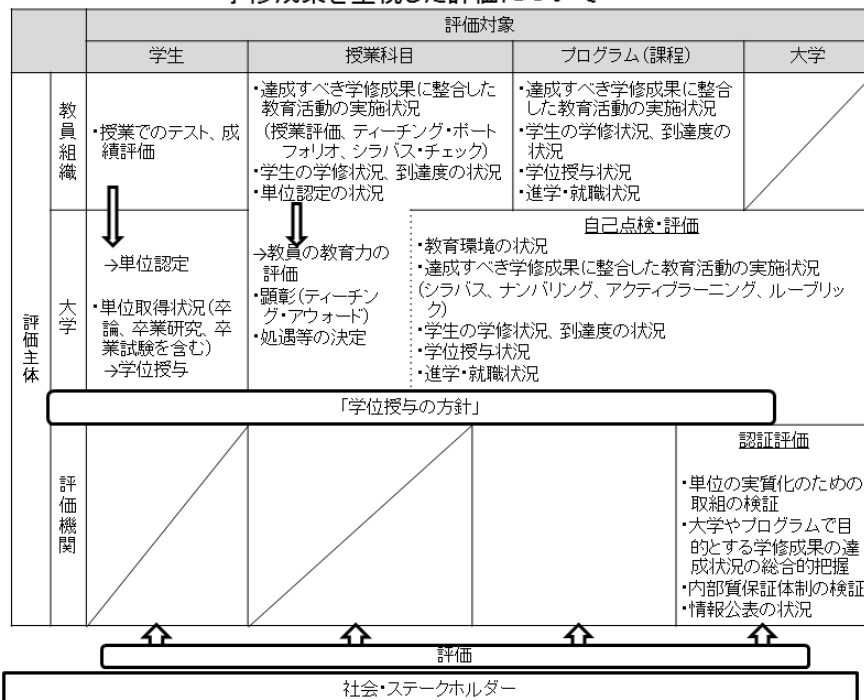
形成的評価＋総括的評価

“可視化”はエビデンスを活用し、学生自身や社会を納得させるもの

＋教育改善に有効活用

4

学修成果をめぐる評価の位相(中教審「質的転換答申」) 学修成果を重視した評価について



5

就活における面接依存型選考特性

○ 新卒者の選考手法

	用いた方法 (複数回答)	最も重視した方法
面接(グループを含む)	91.8%	81.4%
適性検査	47.0%	4.1%
グループディスカッション、グループワーク	10.7%	2.4%
大学名	10.8%	2.2%
筆記試験	46.7%	2.2%
推薦	12.7%	2.1%
エントリーシートや履歴書などの書類	72.7%	0.9%
大学での専攻	23.3%	0.9%
大学での成績	43.2%	0.6%
縁故・紹介	15.5%	0.5%

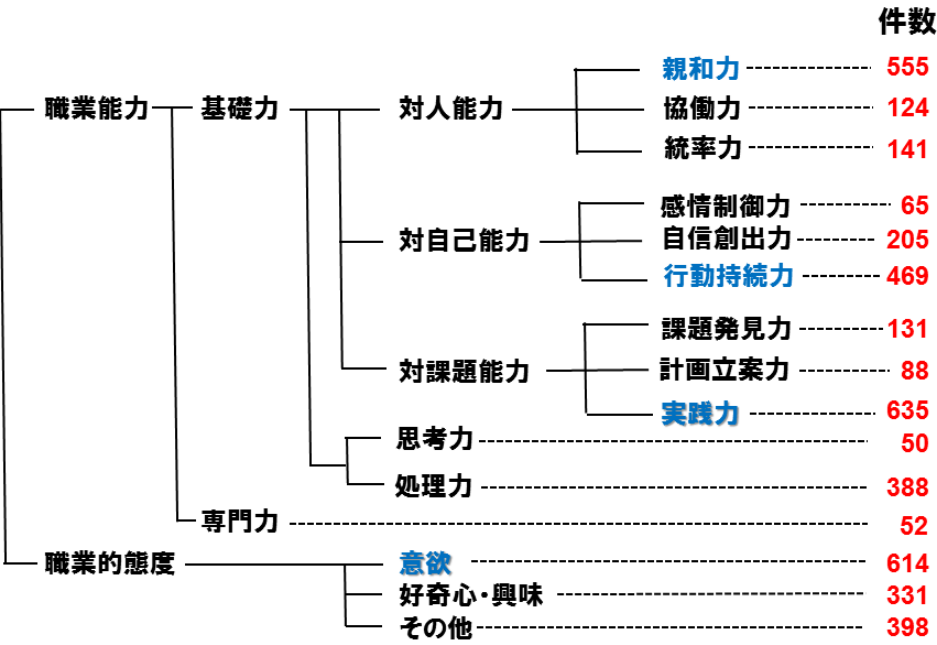
○ 面接による選考の特性

- 1 コミュニケーションスタイルが強調される
- 2 短期的に活躍できそうな人を選びやすい
- 3 第一印象で決まる
- 4 多く練習した人がよく見える

出典：リクルートワークス研究所「企業の採用状況と採用見通しに関する調査」(2012年2～3月調査実施)

6

新卒者に求められているもの



出典：リクナビの「選考基準」に記載された言葉の分析 32業種×無作為抽出30社

7

B.本プロジェクト開始後の“気づき”

8

B-1 学修目標の設定と達成度

米国の大学がすべてうまくいっているわけではない

→KUIS学修ベンチマーク尺度設定の修正が必要

大学自身の公約達成のための責任？

: “Benchmark(到達必要レベル=レベル2?3?)”
と”Capstone(理想目標=レベル4)”レベル設定

cf. 日本人の評価観、学生の自尊感情、自信

→教育活動や返却型feedbackはしていても、

reflectionが不十分

→reflectionとprogramの方法・内容の改善

9

B-2 学修目標を達成するための方略としての 授業プラン(組織)

- 1学期に学生が履修する科目が10科目なら1科目へのエフォート率は10%、12科目なら8%にすぎない
- 学生を学びに集中させ、効率的に学ばせるためには、学科(学位プログラム)単位での方略が必要
- 科目間“連携”には限界があり、学年・学期のテーマを定めての“統合integration”が必要

10

B-3 学修目標を達成するための方略(教員)

- 目標に適した内容・方法になっているか
- 15週にふさわしい目標・スケジュール
- 教室外学修の課題・スケジュール・必要時間がシラバスに盛り込まれているか
- 他科目との連携はnot“目的”but“手段”
 答えのひとつではない“課題”
- 科目のねらい、それを達成するための手段(内容、方法、課題)であることが伝わっているか？
- HIPについては、「場」から学べること
 +「問題設定」から学べること(教員の“力”)

11

参考 Wabash Collegeからの学び

同大学はHEDS(Higher Education Data Sharing Consortium＝本連携事業のベンチマーク)のリーダー校

- Good Teachingや**教員の主体的・能動的な学生への関わり**(教室外、即時性、高期待、コミュニケーション)は効果大
- Deep Learning(分析、**統合**、**振り返り**、**総合化**)も効果大
- Academic Challenge(難しい課題)も効果的
- 学生が多様な人々と交流することが重要

12

B-4 学修成果の評価と活用

- 学生の行動経験が学修成果の予見に有用
 - データから情報共有、部門別分析、GP教員から学ぶ
 - データから読み出す、仮説をつくってみる、学習を改善するヒントをえる
- それに基づく「Action」は？授業のやり方の改善
- 学生の声を聞くことの重要性、ピア観察、上級生活用
 - データを探し続けるより、何かを変えてみることの重要性

13

B-5 多元的な評価とは

Institutional評価よりProgram評価の方が個人裁量大

評価の方法の多元化とその組み合わせが重要！

目標にあった評価方法の組み合わせ(Assessment Plan)

- 自記式質問票の実施前後の比較
 - スーパーバイザー & 学生自己評価(事前・事後)の共通ルーブリックで照合し学生にインタビューし確認(インターン)
 - 共通ルーブリック(学生、スーパーバイザー) + 市販テスト活用
 - プログラム評価者による評価 + 第3者による評価(ルーブリック活用)
 - 学生ポートフォリオに現れる変化と成長
- アセスメントするだけでなく、そこから何を生み出すかが重要

14

C. 成長の可視化と教学マネジメント

15

C-1 KUISの教育が直面する課題

- 1) 大学の成績の社会的通用性の低さ
cf. インターンシップと大学での成績評価をする米国
- 2) 就活で出遅れ・立ち止まる学生の存在
- 3) KUIS学修ベンチマークの達成度や向上をどう学生に実感させるか
- 4) ベンチマークやe-Portfolioに向かう学生の動機づけや学力・学修習慣の個人差の大きさ
- 5) ベンチマークやe-Portfolioの評価・活用方法の改善
- 6) ルーブリックの開発・活用の組織的取り組みの改善
- 7) *Reflection*や学生のファシリテーションの方法改善

16

C-2 学生個人の成長の可視化とは

学生に達成させたいのは

- i) 目的意識(ライフプラン・学修プラン)と動機づけをもって学修・学生生活を送ることができる
- ii) 自己効力感・自信を持つことができる
- iii) 汎用的能力(KUIS学修ベンチマーク)を獲得することができる
- iv) 専門的知識・経験・汎用的能力の総合的な活用ができる
- v) 学修成果・成長を可視化し、活用することができる

17

C-3 教学マネジメントの達成課題(1)

- (1) 学位プログラム(学科)単位で、教育目標(全学+学科)を共有し、科目ごとに目標が分担できている cf.カリキュラム・マップ、シラバス
- (2) 教育内容のタテ・ヨコの構造化と分担ができる cf. ナンバリング、課題マップ、Learning Community
- (3) 学位プログラム・学年単位で、活用するHIP(教室外プログラム)やアクティブ・ラーニングの手法が共有・分担されている cf. HIPの選択、PBL、アクティブラーニング
- (4) 科目の到達目標に即した教育内容や教育方法をとっている cf.シラバス、授業評価、適応度調査

18

C-4 教学マネジメントの達成課題(2)

- (5) 教育目標の達成度測定に適した評価プラン(方法、頻度、多元性)になっている
- (6) 公正で偏りのない評価方法になっている
- (7) 形成的評価と総括的な評価の両方を含んでいる
- (8) 学生に対する **フィードバックや助言・指導・支援**を継続的に行っている
- (9) **躓いた**(躓きかけている)**学生**に対し、大学・学科・教員のもつ**支援に誘導**できている
- (10) **学生の背景・特徴にあった効果的な支援策を提示・実施**できている→**学生支援型IRの強み**

19

おわりに

- 学部・学科の目標を達成する「教学マネジメント」には
学位プログラムの目標の共有
自分の担当科目の目標の確認
科目目標に応じた内容、方法、評価の実践
が必要→HIP
- 協働・連携は効果を上げるための必要条件(相乗効果)
課題マップ(科目間連携だけではない) =ヨコ
ナンバリング、カリキュラム・マップ=タテ
- **教育の専門家=教員、学修の専門家=学生**
学生の成長にとってハイ・インパクトであることの確認
Deep Learningをどう実現し、身につけてもらうのか
→**“主体的な学び”を身につけた学修目標の達成**

20

2. 全国高等教育研究所等協議会報告

関西国際大学 学習支援センター長 / 人間科学部

上村 和美

2.1 2012年度の現状報告

2013年2月20日開催の協議会では、以下のような報告を行った。

■センターの概要

◆代表者：上村 和美（センター長）

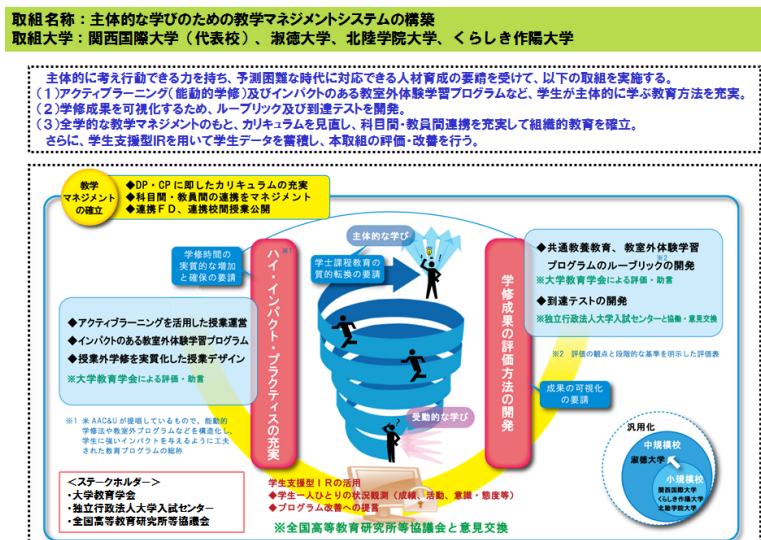
◆設立年：1998年4月(高等教育研究所) 現名称は2008年4月から

◆本センターは、初年次教育部門、教育開発部門、キャリア教育部門の3つからなります。初年次教育部門では、学生の高等学校から大学への円滑な移行を促進する「初年次教育」に関する研究と教育プログラムの開発を行なっています。教育開発部門では、学士課程教育における質保証に関する研究と教育プログラムの開発を行ない、教育の改善と質の向上に努めています。キャリア教育部門では、望ましい職業観・勤労観を育み、主体的に進路を選択する能力・態度を育てるための様々なツールの開発や就職活動支援に努めています。

■文部科学省平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」に採択

文部科学省の平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」に、本学を代表校（連携校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学）として申請した取組「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」が採択されました。高等教育研究開発センターおよびセンター内に新たに設置された大学間連携共同教育推進事業室がこの事業の運営母体となっています。

平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組



◆取組概要

現代社会では、主体的に考え行動できる力を持ち、予測困難な時代に対応できる人材の育成が求められており、大学は学士課程教育の質的転換を図らなければなりません。そのような要請を受けて、本連携取組では、次の取組を実施します。

第一に、アクティブラーニング（能動的学修）およびインパクトのある教室外体験学習プログラムなど、学生が主体的に学ぶ教育方法を充実し、授業外学修時間を確保した授業デザインの向上を目指します。第二に、学修成果を可視化するため、ルーブリックおよび到達テストの開発を行います。第三に、全学的な教学マネジメントのもと、「学位授与」および「教育課程編成・実施」の方針に即してカリキュラムを見直します。また、教員の個性を活かしながら、科目間・教員間連携を充実して組織的教育を確立します。さらに、学生支援型 IR を用いて学生パネルデータを蓄積し、本取組の評価・改善を行い、連携校以外の大学でも適用できるよう汎用化します。

■ラーニングコモンズスペースの開設 teaching から learning へ

1月16日（水）の昼休みを利用して、三木キャンパス4号館1階に新設されたラーニングコモンズスペースのオープニングセレモニーを実施しました。

このスペースは、現在、本学が代表校として事業を推進している「大学間連携共同教育推進事業・主体的な学びのための教学マネジメントの構築」の一環として開設したものです。この4号館1階のラーニングコモンズは、学習者が自由に出入りでき、テーブルやイスを自由なフォーマットに組み替えて学習活動が行える場所です。また、無線対応プレゼンテーション機器 wivia2 が利用できる

ブースも4つ揃えていますので、学生個人が所有するノートパソコンを活用したプレゼンテーションの練習などが可能となりました。



■全学FD等（実施予定含む）

◆第1回全学FD 2012年8月7日（火）～8月8日（水） 於：尼崎キャンパス

◆第2回全学FD 2012年9月13日（木） 於：三木キャンパス

◆第3回全学FD 2013年2月26日（火）～27日（水） 於：三木キャンパス

◆勉強会（連携大学との共催）

◇テーマ：協同学習

日時：2013 年 2 月 21 日（木）10：00～16：00

場所：関西国際大学尼崎キャンパス

講師：創価大学 教育・学習活動支援センター長 関田一彦先生

◇テーマ：ループリック開発

日時：2013 年 3 月 12 日（火）

場所：関西国際大学尼崎キャンパス

講師：島根大学 教育開発センター准教授 森朋子先生

2.2 2013 年度の現状報告

2014 年 2 月 5 日開催の協議会では、以下のような報告を行った。

■センターの概要

◆代表者：上村 和美（センター長）

◆設立年：1998 年 4 月（高等教育研究所） 現名称は 2008 年 4 月から

◆本センターは、初年次教育部門、教育開発部門、キャリア教育部門の 3 つからなります。初年次教育部門では、学生の高等学校から大学への円滑な移行を促進する「初年次教育」に関する研究と教育プログラムの開発を行なっています。教育開発部門では、学士課程教育における質保証に関する研究と教育プログラムの開発を行ない、教育の改善と質の向上に努めています。キャリア教育部門では、望ましい職業観・勤労観を育み、主体的に進路を選択する能力・態度を育てるための様々なツールの開発や就職活動支援に努めています。

■文部科学省平成 24 年度「大学間連携共同教育推進事業」に採択

文部科学省の平成 24 年度「大学間連携共同教育推進事業」に、本学を代表校（連携校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学）として申請した取組「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」が採択されました。高等教育研究開発センターおよびセンター内に新たに設置された大学間連携共同教育推進事業室がこの事業の運営母体となっています。

◆取組概要

現代社会では、主体的に考え行動できる力を持ち、予測困難な時代に対応できる人材の育成が求められており、大学は学士課程教育の質的転換を図らなければなりません。そのような要請を受けて、本連携取組では、次の取組を実施します。

第一に、アクティブラーニング（能動的学修）およびインパクトのある教室外体験学習プログラ

ムなど、学生が主体的に学ぶ教育方法を充実し、授業外学修時間を確保した授業デザインの向上を目指します。第二に、学修成果を可視化するため、ルーブリックおよび到達テストの開発を行います。第三に、全学的な教学マネジメントのもと、「学位授与」および「教育課程編成・実施」の方針に即してカリキュラムを見直します。また、教員の個性を活かしながら、科目間・教員間連携を充実して組織的教育を確立します。さらに、学生支援型 IR を用いて学生パネルデータを蓄積し、本取組の評価・改善を行い、連携校以外の大学でも適用できるよう汎用化します。

■ 連携大学から代表校へ教員が出向、協働による教学マネジメントの構築

2013 年度に連携大学から代表校への出向をとおして、ルーブリックの開発や代表校における教学マネジメントの運営などに参画をしました。ルーブリックの開発については、実際に代表校の教員と出向者が共同で作業を行うことでルーブリック作成のノウハウを学ぶとともに、背景の理解を深化させることができました。また、運営体制や学生支援体制などの各種会議、委員会にオブザーバーとして参加することにより、代表校における教学マネジメントシステムについて学ぶことができました。その他の出向による成果としましては、大学間の人的ネットワークの充実化により、情報収集・交換などを円滑、活発に行うことができたことなどが挙げられます。これらの成果をもとに、2014 年度以降にそれぞれの本務校において教学マネジメントの構築や学生の能動的な学修を促進させるような教育の改善、FD の推進を行っていきます。

■ 全学 FD 等（実施予定含む）

◆第 1 回全学 FD 2013 年 8 月 6 日（火）～8 月 7 日（水） 於：尼崎キャンパス

◆第 2 回全学 FD 2013 年 9 月 17 日（火） 於：三木キャンパス

◆第 3 回全学 FD 2014 年 2 月 24 日（月）～25 日（水） 於：尼崎キャンパス

3. ホームページ

本取組の情報発信のため、ホームページを開設した。当サイトでは本取組の3本柱である「教学マネジメントの確立」、「ハイ・インパクト・プラクティスの充実」、「学修成果の評価方法の開発」についての説明および本取組における活動実績に関する報告を掲載している。

(当サイトのアドレス：<http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/extension/renkei2013/index.html>)

大学間連携共同教育推進事業

主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築

現代社会では、主体的に考え行動できる力を持ち、予測困難な時代に対応できる人材の育成が求められています。そのような要請に応えるため、大学では従来の講義型授業のように専門的知識を伝達する教育から、学生が能動的に相互に議論や提案ができる教育へ転換していかなければなりません。本取組では4大学が連携し、このような転換を組織的に進めていくための教学マネジメントシステムを構築します。

4大学連携

関西国際大学
淑徳大学
北陸学院大学
くらしき作陽大学

トップページ

取組概要

取組内容

連携大学・連携機関

関係リンク

本取組の三本柱



教学マネジメントの確立

各連携校がそれぞれの教育目標の達成に向けて体系的な教育課程を構築し、教員間及び科目間の連携を図った組織的な教育を実現していきます。

ハイ・インパクト・プラクティスの充実

ハイ・インパクト・プラクティスと呼ばれるインパクトの強い教室外でのプログラムや教室内での能動的学修を用いた教育を実践していきます。

学習成果の評価方法の開発

ルーブリック（評価の観点と段階的な基準を明示した評価表）等によって、学修成果を可視化する測定方法を開発していきます。

新着情報

TOPICS

2014年11月22日	シンポジウム『教学マネジメントの改善と学修成果』～学生支援型IRの可能性～を開催しました
2014年11月22日	千葉県選挙管理委員会と連携した教室外プログラム(淑徳大学)
2014年11月22日	ラーニングコモンズの活用状況について(淑徳大学)
2014年11月22日	AU_HGU Project 2014/HGU-AU Teaching Collaborative (北陸学院大学)
2014年11月22日	インターンシップにつなげる正課外活動「就活ゼミ」(北陸学院大学)
2014年11月22日	2014年8月KSU高等教育研究センター主催第1回公開講演会開催(くらしき作陽大学)
2014年11月22日	KSU高等教育研究センターFD研修会(くらしき作陽大学)
2014年10月23日	教室外授業における遠隔指導システムの活用(関西国際大学)